「登小学校を回顧して」（抜粋）　小田島達夫

登小学校自作のプールと風呂造りの思い出

『吉野小学校・登小学校廃校に当たって　思いで』掲載

「いい湯だなアハハ」といいものどかな歌声が水飲み場を改造した風呂場から聞こえてくる。１人が歌うとまた負けじと歌い出す。「早く出てよ」と女子の声が聞こえる。風呂場の中では校長先生と１・２年の男子がご機嫌で歌っている。

古い住宅から風呂釜を見つけ、利用方法を考えていたのだが、これで風呂を作り、入浴させて帰したらということになり、ＰＴＡに相談したところ、さっそく昔のハッカ釜の口ストルを見つけたり、コンクリート枠を役場と交渉して見つけてくれたりして、立派な風呂を作り上げてくれた。洗い場は水飲み場を利用して私たちが作った。

４時間目の終わりに５・６年生が火を焚きつける。給食が終わって１・２年生がプールに急ぐ。タテ18メートル、ヨコ８メートルの簡易プールだ。これも私たちが考案したものだ。グランド横の草地をショベルで掘って、肥料袋を千五百ほど砂を詰め、それを掘った縁に千鳥に積み上げ、それにビニールを回すというものだった。肥料袋を使うということはなかなかユニークだと評判を取ったものだ。

底には何を使ったらよいかということで試みとして肥料袋を切り開いて１枚のシートを作り上げ、それを底に敷くということにした。運動場いっぱいに拡げて電気ごてで貼り合わせ、そのできあがったものをおそるおそるプールに運んで底に敷いてみた。敷いてみると底が柔らかい泥のためにズルズルとぬかり、貼り目から泥が入り込んで底の役目を果たさなかった。

さっそく教育委員会に走り、バラスを買ってもらい、ダンプで10台ほど運び込んだ。それで泥を抑えることに成功した。グランドの横を流れる小川をせき止めて流れの道を作り、土管を通してプールに流し込むという方法を採った。砂利、木炭などを入れて、一応の浄化装置も作り上げた。冷たい水が流れ込んで流水になったところでプール開きだ。子ども、部落の方々の見守る中でお祓いが済み、プール開きが行われた。ちょうどＮＨＫの取材があり、「私たちの小さなプール」と題して子どもの時間に全国放送されたものだ。

できあがったプールで子どもたちは泳いだ。ひとつも泳げなかった子どもたちが今日は１メートル、明日は２メートルというように上達していった。どの学校の子どもたちよりも泳ぐことができるようになり、子どもたちに誇りと自信がついていった。その後、砂利敷きのプールは、底だけモルタル塗りになったが、もぐるとザリガニやドンコが泳いでいるほほえましいプールであった。

ちょうど山の木を切って枝木がたくさんあったので、それを拾ってきて火をつけ、その火にあたりながらプールに飛び込むというようなものだった。こんなプールが常呂町に３つもできるようになってへき地の子どもたちも泳ぐことができるようになった。

泳いだだけでそのまま帰して良いのだろうかと思案した結果生まれたのが前述の風呂だ。なかなか子どもたちの評判が良い。教師と子どもの裸のふれあい、そこには何の虚飾もない裸の人間と人間のつきあいがあり、それがどんなに明日の指導に大きく役立ったことであろう。「早く出てよ」「まだだよネ先生」と１年生の声、裸と裸のふれあい。小さい学校だったからこそできたと思うのである。（略）

※注：プール構築開始　昭和42年6月14日
プール完成　昭和42年7月18日
プール開き　昭和42年7月24日
学校風呂設置　昭和44年7月2日